

1 寺と庭と犬と

※題字／森川芳聲



もくじ

- 2 巻頭言 謹賀新年 山口 秀範
- 3 あれこれ思つこと⑨ 古川 忠
- 4 「偉人レポート」 曾谷 昌広
- 6 教師生活を振り返って 與島 誠央
- 7 唱歌／童謡
― 先人からの贈りもの⑤ 森田 仁士
- 8 天地いっぱい⑤ 森川 徹
- 9 みとらしのあじさのまゆみ② 廣木 寧
- 10 TERA KOYAふおとれぼーと
- 11 “あちこちde寺子屋”のご案内
- 12 歌碑のこころ(21) 編集余録 余録の余録



歌碑／福岡県田川郡香春神社

歌碑のこころ

庭の千草

庭の千草も 虫のねも
かかれて さびしく なりにけり
ああ しらぎく 嗚呼 白菊
ひとり おくれて さきにけり

※詳しい解説は12頁に掲載しています



境内から望む香春岳一の岳の変貌／福岡県田川郡香春神社

謹賀新年

今年の寺子屋

お揃いで新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。令和四年が皆様にとつて実り豊かな年となるようお祈りします。

寺子屋モデルでは、大人向け・子供向け偉人伝講話を事業の中心に据え、夏頃からは久しぶりに「寺子屋の先生養成講座」を開講予定です。

また、十年前に上梓した『日本の偉人100人（上下巻）』の姉妹本『+50人』（仮称）が、春に致知出版社から出ます。是非手に取って、新しい偉人と出会ってください。

小中一貫校「志明館」は二年後の開校に向けて、県への申請手続き開始、校舎等の改修工事着工と進めて参ります。四月には先行して採用する教頭先生他も揃い、教育内容の構築と相互研鑽に励んでもらいます。

今年も、現代日本へと甦る寺子屋事業にご注目頂き、温かいご支援をお願いします。

「志明館」の教育内容

「志明館」の教育内容につきこれまで議論を尽くして新機軸を構築してきました。今後二年のテスト期間に実践を見据えて更に試行錯誤を続けることとなります。

『寺子屋三部作』（偉人伝・素読暗唱・伝統文化礼儀作法）で人間力の基礎を培いつつ、子供たち自身の疑問や好奇心に基づく課題を見つけさせ、自らの力と様々な助けを組み合わせながら解決に近づけていくという「発憤授業」は、「志明館」の売り物の一つですが、具体的な授業の進め方を構築するのはこれからです。

どこにもない学校を作り将来の日本の教育に新しい道筋をつけようとする試みは、時として海図のない荒海に漕ぎ出す思いに苛まれることもありませんが、内外の先行事例に励まされつつ準備を加速します。

代表世話役 山口 秀範

三養基中学校

十三年前の「寺子屋だより（21号）」でお伝えした佐賀県立三養基中学校の教育実践は、折にふれて学校作りの指針としてきました。

新設校の初代校長として招聘された前波伸尾先生は、これと見込んだ少壮教育者を全国から集め、先ずは教師たちに毎日五時間の自己研鑽を課して各科目の教科書を自主編集させます。

授業の出欠は取らず、期末テストなしですが、予習を怠ると「家で勉強してから出直せ」と追い返され、自ら努力する過程を重視しました。

理科の観察は野外での実地、作文も散策後に自然体験を書かせました。毎月の四〇キロ行軍は悪天候でも励行して心身を鍛え、一方「今日は勉強するには天気が良すぎる。山登りするから弁当持つて集合」と生徒を喜ばすことも忘れませんでした。

前波校長は数か国語を操り、自ら教員資格検定で五科目を同時合格する実力の持ち主でした。三養基中でも英語教育に発音記号を導入したり、数学の授業にグラフを多用するなどを試み、文部省主導のマンネリ化を打破し、形式的画一教育と闘いました。「志明館」に採り入れた斬新な満載の前波イズムです。

カンボジアCLA

電話通信業界に革命を起こしたフォーバルの創業者・大久保秀夫氏は早くから「志明館」構想に賛同をお寄せくださり、毎月作戦会議におつき合い頂いています。

この大久保氏がカンボジア人子女のための幼少中一貫校CLA（シーセフリーダーズアカデミー）を五年前プノンペンに開設し、大きな反響を呼んでいます。国語（クメール語）と歴史以外は日本語で教育し、利他の心を養う。一方的に教えるのではなく子供たちの「気づき」を引き出す。チームを組んでの問題解決型学習など見習いたい

内容も多々あります。

「志明館」開校後は連携を深めて真の国際化教育の一助にしていきたいと楽しみにしています。

松下村塾

吉田松陰の研究者・川口雅昭氏は「松下村塾」の特徴を、「自己教育」の出来る学習者を輩出したことだと言います。そしてそれは松陰自身の若き日の遊学体験がもたらしたもののようです。

二十歳のころに江戸で学ぶ機会を得た松陰はほぼ毎日様々な勉強会に参加し、借りた書物を精読します。その後の友人との東北旅行も、土地を知り人から学ぶ得難い自己教育の場であつたでしょう。

海外渡航を果たせず繋がれた野山獄で、同囚たちに語つた『孟子』の講義録（『講孟劄記』）に次の一節があります。「養は、涵育薰陶して其の自づから化するを俟つを謂ふなり」

涵は綿を水に浸す、育は小児を乳で育て、薰は香を焚きこめ、陶は土器を焼き堅めることで、いずれも時間をかけて自然に感化していきます。やがては自力で善悪を見分ける力量即ち自己教育力を身につけるよう導くのが「養」でしょう。

「志明館」で児童生徒たちの自己教育力を養いたいと切に願っていますが、そのためにはこれから採用する教師たち自身の自己教育力を磨いてもらうのが先決です。

来春から始動する志明館の先生方にはこれまでの経験に囚われない自由な発想を求め、開校準備の必須科目に『講孟劄記』輪読を置いて「学び」の原点を探ります。

暮れのある日一通のメールが届きました。「飛行機内で隣り合わせた方から寺子屋だよりを頂いた。引き続き購読したいが」という問い合わせです。早速お送りして応援にもなつていただきました。

嬉しいご縁を繋いでくださった東京から長崎へ出張中だった方（お名前不明）、本当に有難うございます。多くの皆様方に支えられる寺子屋活動を実感し、お年玉を頂戴した気分です。